

## 〈関連論文〉

### スタンリー・カベル『センス・オブ・ウォールデン』に読む 「読むこと」による教師の変容 —— 教師の教育としての哲学 ——

高柳 充 利

#### I. 序 論

本稿は、スタンリー・カベルの著作『センス・オブ・ウォールデン』<sup>1)</sup>を読むことを通して、「読むこと」<sup>2)</sup>による教師教育の可能性を再提起することを目的とする。近年、教師教育において「読むこと」は看過されるか、あるいは疎んじられてきた。「教師の質の向上」を目指すそうした潮流のなかで重用視されているのは、生徒を指導する上での実践的なスキルであり、あるいは効果的な授業を行うための知識の獲得である。そのような視点からすれば、例えば、教師教育の試みとして文学作品や哲学書を読むことは、あまりに教養主義的なように見えよう<sup>3)</sup>。しかし、本稿では「読むこと」を教師教育の核として見立てることが可能なのではないか、という目論みのもとに筆を進める。その進み行きが単線的なものとなり得るそうにないことは、この序論の段階から予感している。その理由のひとつは、「読むこと」の多層性にある。そしてまた、その多層性にこそ「読むこと」の教師教育の豊かさも内包されていると考える。

「読むこと」の教師教育を探究する上で、本稿において取り上げたいと考えているのは、現代アメリカ哲学界において、英米系・大陸系の哲学のみならず、文学作品・オペラ・映画等を「読むこと」を精神的に実践しているスタンリー・カベルの著作『センス・オブ・ウォールデン』である。本書において、カベルは特にソロー、エマソンといったアメリカ文学・哲学における古典ともいえる思想家を読み直す試みを展開する。それも、従来の支配的な読み方とは趣を異にする文脈において。支配的な読み方、とはソローやエマソンを次のような惹句により理解するようなそれである。ロマンチックなナチュラリスト、論理に飛躍と矛盾の目立つ超絶主義者、アメリカ的個人主義の称揚者、といったところだ。それでは、カベルの読み方とは、どのようなものか。その一端を本稿で明らかにしたいと考えている。

多層性の話に戻ろう。「読むこと」による教師教育を論じる上で、カベルの『センス・オブ・ウォールデン』を読むことに着目することは、すでに述べた。『センス・オブ・ウォールデン』は、ソローの『ウォールデン』<sup>4)</sup>を読むことについて書かれた本であり、「読むこと」の思想をカベルが中心的に取り扱った著作であると考えられる。実際、その「序文」においてカベルは同書が「本についての本<sup>5)</sup>」であると述べている。つまり、『センス・オブ・ウォールデン』の読者はその本を読み始めるや否や、『ウォールデン』を読むということに関して

読むことになる、と宣告されるわけである。このような多層的な構造は、続く文章においてさらに強められる。カベルは言う。「『ウォールデン』そのものもまた「本についての本」であり、すなわち、「書くことと読むことそれ自体についての」本であるのだ、と<sup>6)</sup>。

こうした重層的な構造を意識する上でも、副題を「教師の教育としての哲学」とした。「教師の教育としての教育」とは、具体的にはカベルの著書『理性の主張』における「哲学は大人の教育となる」との表現を源流とする<sup>7)</sup>。ヒラリー・パットナムはこの表現から想を得、カベルの省察を「大人の教育としての哲学」という思想を体現するものであるとしている<sup>8)</sup>。齋藤直子はカベル・パットナムの思想にたいして特に次のように応答している。まず、カベルの思想は、デューイのプラグマティズムを批判的に再構築する試みである、と齋藤はとらえる。そうした視点にたったうえで、齋藤は「教育としての哲学、哲学としての教育」のプロセスを描き出そうとする<sup>9)</sup>。本稿は願わくばこうした思想の系譜の末席に位置づけられるものでありたいとの想いのもとに書かれている。どのような方法において、それでは本稿はそうした一連の思想的試みに参画しようとしているのか。それは、次のような問いを探究することによって、哲学のなかに大人の教育が内在し、あるいは教育において哲学的思考の再認識がなされる。もしそうであるならば、その過程において教師と呼ばれる者の姿がどのように見いだされるのか。— この問いの探究が、文字通り本稿の副主題である。以降、このような副旋律をいだきつつ、「読むこと」の教師教育という主旋律を追うことにする。

よって本論の構成も、おのずと以下のようなものとなる。まず（教師として）『センス・オブ・ウォールデン』を読む上で最も気になった問いから出発する。その問いとは「どのように『ウォールデン』『センス・オブ・ウォールデン』を読むのか」である。そしてその問いは「なぜソローはこのように『ウォールデン』を、なぜカベルはこのように『センス・オブ・ウォールデン』を書いたのか」との探究へと様相を変えながら続く。こうした問いに回答する形で、あるいは回答のなかに見いだされた教師の姿を記すという方法で、『ウォールデン』『センス・オブ・ウォールデン』が内包する教師教育の思想を読み込みたい。このような試みにおいて転換点となったのは、カベルの世界的な読み手である英国シェフィールド大学教授ポール・スタンディッシュと米国ニューヨーク大学準教授ルネ・アルシラによる特別連続講義であったこともあらかじめ記しておく<sup>10)</sup>。

## II. 本 論

### 1. どのように読むのか：カベル哲学と教師教育の距離

ソローの『ウォールデン』を読むことは、ある困難を伴う。既存のイメージで読み込んでしまいがちになる、という難しさである。例えば、岩波書店による文庫本の帯につけられたようなイメージで、「晴耕雨読」「自給自足」「読書と思索」等々。ちょっとしたインテリのアウトサイダーが、町を離れて、森に小屋を建てる。青年は自らジャガイモやトウモロコシを育てる。湖で、ある時は水をくみ、ある時は散歩をし、自然の美しさを讃える。彼の小屋の机の上には、ホメロスが置かれている。簡素な生活のなかで、若者はひとり自由に思索す

る——。もちろん、こうした読み方が「誤った」読み方である、と主張するつもりはない。『ウォールデン』の持つ魅力のひとつではあろう。しかし、果たしてそれだけの作品なのだろうか。齋藤は指摘する。『センス・オブ・ウォールデン』が「読むという行為」により訴えているのは、「ことばとの関わりのなかで自己を発見し直す自己変容としての教育のプロセス」であり、「大人の教育としての哲学」という主題である、と<sup>13)</sup>。

ここに記されているプロセスおよび主題と、「読むこと」を通しての教師教育とは、非常に隣接あるいは交叉する部分が多い。例えば、大人である教師が教え、子供である生徒が学ぶ、という固定的な構造を打ち破る力が「大人の教育としての哲学」にあるのではないか。あるいは、社会の趨勢に適合した教師を作り出す、という一部の教師教育に見られる効率最優先の発想から抜け出す道筋を、「ことばとの関わりのなかで自己を発見し直す自己変容としての教育のプロセス」は示してくれはしまいか。このように期待は膨らむ一方、『ウォールデン』自体はどうか、という疑いが頭をかすめる。「晴耕雨読」の記録として読まれることの多かったソローの作品が、果たして「自己変容」の教育哲学の議論にまでつながるのだろうか。当初、断絶は深いように思われた。それは、上に掲げたような齋藤の指摘と『ウォールデン』の内容との間に距離がある、という意味ではない。一般的に流布している『ウォールデン』像と、筆者が興味を持つ教師教育とが、思うように交流しあわなかったのである。

例をあげた方が良いだろう。『ウォールデン』に、「冬の湖」という章がある。その出だしは、次のようなものだ。

ある静かな冬の一夜が明けたとき、私は睡眠中に、なにを——いかに——いつ——どこで？——といった問いをつきつけられ、なんとか答えようとしたがうまくいかなかった、という印象をいだいて目覚めた。だが、あらゆる生物の住処である夜明けの「自然」は、すがすがしい満ち足りた顔でわが家の大きな窓からのぞきこんでおり、彼女の唇はなんの問いも発していなかった。私が目を覚ましたときには、問いへの回答はなされていたのだ。(中略)「自然」はどんな問いもつきつけはしないし、われわれ人間が発するどんな問いかけにも答えはしない。彼女はとうのむかしに、そう決心したのだ。<sup>12)</sup>

こうした箇所を読むとき、ネイチャーライティング的<sup>13)</sup>な読み方を試みることは、筆者にはなじみ深い作業だった。例えば、物質文明が宿命としている分析的思考法を、「自然」との対話により超越することができる。このような解釈の方向性である。しかし、森に隠遁する青年と自然の対話、という人口に膾炙しているナチュラルスティックな読み方は、「言語を通じた自己変容と社会変容」という思想とは、やはり交錯しようがない。

ハーバード大学の米文学者ローレンス・ビュエルによる、こんな一文がある。「エマソンとソローは社会変容の鍵は個人の変容にあると頑強なまでに信じていた。<sup>14)</sup>」ビュエルは社会変容というが、しかしソローの言葉は、どのように自己と社会の変容につながるのだろう

か。つまりは、『ウォールデン』を読むことが、本当に「読むこと」の教師教育に結びつくのか。こうした疑いが浮かび上がってくる。

エマソン、ソローの思想から「大人の教育としての哲学」を展開するカベルは、それでは『ウォールデン』をどう読んでいるのか。センス・オブ・ウォールデン』を見てみよう。カベルは同じ箇所、つまり『ウォールデン』第十六章最初のパラグラフを引用し、次のように言う。

彼は二度目覚める。一度目は、彼の本を回避する諸処の問いを最終的に要約し投げかける問い、あるいは数々の問いの印象に対してである。(中略) 問いは眠っているうちになされた——眠りにある人々から覚醒の危機にある人に向けて——ということは、問いに答えがないことを意味するものではない。彼の第二の目覚めは、答えを与えられた問いに向けての目覚めである。すなわち、問いがすでに答えられているという事実——さもなくば、答えることは無駄であり、ゆえに問いは理解されていないという事実に向けての目覚めである。こうしたわけで、彼はわれわれに問いかけさせねばならないのだ。すでに答えは出ているということを示すために。われわれが出した答えは、その程度のものであったということを示すために。そして、別の答えが出せるかもしれない。<sup>15)</sup>

ここに、森の若き隠遁者による自然観の独白、という理解とは、まったく違った読みが為されているのは明らかである。しかし、疑い自体が消えたわけではない。つまり、一般的な読みとは違った解釈の可能性をカベルが開いているとしても、それがどのようなものであるのか、そしてそれがどのように教師教育に示唆を与えるものであるのか、という問いが当然生まれてくる。疑いは、角度を変えたにはせよ、依然として筆者の前に横たわっていた。ある意味では、当初の姿よりも、その謎の度合いを深めて。

あえて率直な表現を使おう。ソローの声には、分かりにくさが伴う。もうすこしだけ回りくどくしてもよい。カベルの読むソローの声は——あるいは、ソローを読むカベルの声は——分かりにくさを読む者に与える。いずれにせよ、正直なところ、それは読み手にとって、特に筆者のような読み手にとって、時にフラストレーションとなる。「筆者のような」という特定には、二つの意味がある。ひとつには、ソローを知的な隠遁者とみなすような読み方に慣れた者にとっては、ということである。しかし『ウォールデン』を教育の文脈で——自己と社会の変容という興味のもと——読み込もうとする上では、このように慣れ親しんでいるが固定的な読み方は、むしろ揺さぶられる必要があることはすでに述べた。ゆえにこの意味での困難はかえって望むところであるといえよう。「筆者のような読者」との特定のもうひとつの意味は、教育に関心を持つ者、である。それはソロー・カベルを読むうえで次のような困難さにつながる。このように豊かさをたたえてはいるが謎と複雑さを織り込まれて書かれたものが、教師教育を探る上でどれほどに力を持ちうるか、との疑念に捕われてしまうことである。簡単なものが良い、あるいは分かりやすくないとはいけない、と主張するつ

もりはない。しかし、教師教育を考えるなかでは、どうしても学校で日々格闘する教師の姿を意識する。現場で働く教師が、授業と学級担任の業務と部活動の指導と会議とを終え家に戻ったとする。教師は家族との夕食をすませた後、夜書斎に入り、疲れた体で『ウォールデン』なり『センス・オブ・ウォールデン』なりを開く。そこで、果たして教師としての自己の変容を、自らと同僚と生徒たちの生きる社会の変容を、何かしら示唆されうるであろうか。両書の複雑さは、教師への励ましよりも、むしろ「読むこと」への落胆や断念への要因として作用してしまう危険性の方が高いのではないか。あまりに特化させた空想をもちだすのは軽率のそしりをまぬがれないかもしれないが、そう思ったことがあるのは正直なところだ。

このような疑念に関連する例を挙げたい。雑誌「教育哲学研究」に『センス・オブ・ウォールデン』の書評が掲載された。評者田中智志は、「カベル氏がソロー／エマーソンにふれながら語る『教育』は、発達援助うんぬんといういわゆる「教育」ではない」としながらも、「原著者の舌足らずさ」もあってか「原著を見てもわからない箇所がある」と記している<sup>16)</sup>。評者は教育の思想として『センス・オブ・ウォールデン』を読んだ。しかしその思想を読み込む上で、時に別の形で説明が加えられることの必要性を感じる程の読み込み難さを感じた。そのような意見として解釈できよう。

ここで、カベルの言葉の投げかける謎、あるいはカベルによって示唆されたソローの内包する謎に向けて、教育の視点から解釈を挑む論考について触れたい。特別連続講義を担当した一人であるポール・スタンディッシュによる論文——それも、「スタンリー・カベルと『ウォールデン』の教え」との副題のついた——である。スタンディッシュは言う。

ソローの声の矛盾、その文章のリズムに故意に加えられた曖昧さ、こうしたものは読み手を「読まねばならぬ」状態に置く役目を果たしている。そのような状態において読み手は、ある表現をどのように解釈するか、それにどのように応答するか、そこから何を理解すべきか、それに同意すべきかどうか、といった判断に常に直面することになる。<sup>17)</sup>

スタンディッシュによれば、つまりカベルを読むときに伴う困難さ、あるいはカベルの読むソローの声の難解さとは、意図的に、カベルおよびソロー自身によって生み出されたものであるという。難解さは、カベルの思想を教育に結びつけることを阻むのではない。困難さに直面するような場におかれることこそ、カベルの哲学に内在する「読むこと」の教育へとつながるというわけである。

ここで「どのように読むのか」という問いは形を変えて探究されることになる。なぜカベルそしてソローは、読者に困難を強いるような書き方をしたのか。この点を考えねばなるまい。新約聖書には、イエスがあえて譬え話で語った様子が描かれている。その解釈は尽きまいが、ひとつには直接的にローマ帝国や律法学者たちを批判することは、彼と彼の周囲の者たちの命をたちまち危うくしてしまうという事情が関係していたと考えるむきもある。ある

いは決して教育の機会に恵まれていたわけではない当時の聴衆の脳裏に、鮮明なイメージを残す効果があったと考えることもできる。ソローの場合にはどうなのか。カベルはどうなのだろう。なぜ彼らは、『ウォールデン』にあるような、あるいは『センス・オブ・ウォールデン』にあるような書き方を意図的に選び、それらの書物を書いたのだろう。次節で引き続き考えてみたい。

## 2. なぜこのように書いたのか：「読むこと」における「目覚め」

前節では、教師教育という視点で、ソロー・カベルをどのように読むことができるのか、という疑問から出発した。そしてなぜ『ウォールデン』『センス・オブ・ウォールデン』が読むことの困難さを伴う形で書かれたのか、という問いへと行き着いた。カベルの書き方自体について論じようとするならば、困難が伴うことを承知の上で、何よりもまずソロー・カベルの著作のなかにその思想自体を読み込まねばならない。

さて、筆者は前節において、平易な説明的文体をあえて避けた例として、おそらく最も著名であろうことから、新約聖書に頻出するイエスによる譬え話をあげた。一方、ポール・スタンディッシュは、先に引用した論文で旧約聖書の預言者について触れている。「ソローの言語」は「エゼキエルやエレミヤといった旧約聖書の預言者たちの表現、リズム、描写」を採用しており、カベルもそれを論証している。そうスタンディッシュは述べ<sup>18)</sup>、さらに次のように続ける。

旧約聖書の預言者たちは、民衆に生活が墮落してしまっていることへの注意を喚起する責任を負っていた。それはまた、彼らがまるで耳も聞こえず目も見えなくなってしまうかのようなことを力説するという責任である。預言者たちは来るべき世界を予告する。注意を喚起するという働きは、ソローの本においてはオンドリの姿によって象徴される。ソローは同胞市民の目を覚ますべく朝のオンドリと同じくらい大きな声をあげる。彼らは自らの生活にあって眠ってしまっているからだ。<sup>19)</sup>

スタンディッシュの言葉に導かれ、ひとつの仮説に行き着く。ソローの言語の難解さは、ソロー自身の預言者としての責任のもとに書かれたことによるのではないか。そして、カベルの文章の読みにくさも同様に、カベルがソローを預言者として読み、そしてまた自身も書き手として同じ責任を引き受けているからではないか、と。そうであるならば、次の点を考えねばならない。預言者の責任とはいったい何なのだろうか。スタンディッシュは民衆に注意を喚起すること、としている。しかし注意を喚起するだけなら、簡素な文体で達成することはできよう。むしろ、その方が効果的であると考えるのが一般的だろう。「眠れる人よ、目覚めよ」と言えば良いだけのことだ。なぜ、そうしないのか。このように考えると、ソロー・カベルの意識する「目覚め」は、まどろみにある者が、誰かから「起きなさい」と肩を揺さぶられて、「ああ、目が覚めました」と口にするような種類の目覚めとは違ったこと

を指しているように思える。ソローの「目覚め」を見てみよう<sup>20)</sup>。

ここで『ウォールデン』から新たに引用を示す必要はない。前節ですでに引用した「冬の湖」の章の冒頭は、「目覚め」の描写であった。その部分に対するカベルの応答も、やはり一度引用してある。ゆえに先に引用した箇所から言葉を抜き出しつつ論を進めたい。「彼は二度目覚める。」カベルはそう記す。二段階あるという「目覚め」を、それでは一段階ずつ追うことにしよう。「一度目は、彼の本を回避する諸処の問いを最終的に要約し投げかける問い、あるいは数々の問いの印象に対してである。」ここでいわれている「諸処の問いを最終的に要約し投げかける問い」「数々の問いの印象」とは、ソローの文面にある「なにを——いかに——いつ——どこで? といった問い」であり、そうした問いに「なんとか答えようとしたがうまくいかなかった、という印象」のことを指していると考えて良からう。これが第一の「目覚め」である。つまり、問いを突きつけられたことによる「目覚め」、あるいは突きつけられた問いに答えられなかったという印象を伴う「目覚め」。このことは、「なんとか答えようとしたがうまくいかなかった、という印象をいだいて目覚めた [傍点は引用者]」と続くことから裏付けられる。

さて、いったいこの問いは、それこそ、いつ、誰によって為されたのか。カベルは言う。「問いは眠っているうちになされた——眠りにある人々から覚醒の危機にある人々に向けて——ということは、問いに答えがないことを意味するものではない。」この段階での問いは、どうやら「眠りにある人々」、つまり「目覚め」ていない人々から生じているようである。当然、問われた側も「目覚め」てはいないが、しかしその者の「目覚め」は、始まるようとしている。注目すべきは、この問いには答えがなくはない、とされている点である。これが特に第一と第二の「目覚め」を分つものとなる。

「彼の第二の目覚めは、答えを与えられた問いに向けての目覚めである。すなわち、問いがすでに答えられているという事実（中略）に向けての目覚めである。」ここで述べられているように、二度目の「目覚め」は、問い自体がすでに答えを備えている、ということへの「目覚め」である。それでは、第一段階での問いは、果たして答えられたのか、そうでないのか。第一段階では「答えようとしたがうまくいかなかった」とあるではないか。しかし第二段階では「すでに答えられている」とある。であるならば、「目覚め」ている当人は答えしていないことになる。どう解釈したらよいのか。

こんな風に考えることができるかもしれない。「目覚め」る当人が答えたのかそうでないのかは問題ではない。なぜなら、すでに答えは出ているのだから。では、誰が答えたのか。それは、問いを発した「眠りにある人々」によって。このことは、ソローが『『自然』』はどんな問いもつきつけはしないし、われわれ人間が発するどんな問いかけにも答えはしない」としていることから確認できる。つまり「問い」をつきつけ、また答えるのは「われわれ人間」なのだと明記されているのである。ゆえに第一の「目覚め」は、「眠りにある人々」の発する問いへ答えられなくなることにより生起するとも言える。「われわれ人間」は、日々、問答している。しかしその問答自体に疑問を呈しはしない。問うているようで、実はすでに

答えは出ているではないか。答えているようで、実はすでに誰かによって答えられた答えを繰り返しているにすぎないのではないか。そのように疑問を持つ者は、「なんとか答えようとしたがうまくいかなかった、という印象」とらわれざるを得ないだろう。ゆえに一般的・常識的な意味では、「目覚め」は——「覚醒」は——「危機<sup>21)</sup>」である。しかしそのような危機のなかにこそ、「別の答えが出せるかもしれない」という可能性がある。これが第二の「目覚め」の課題となる。

では、「別の答え」は誰によって出されるのか。もちろん「目覚め」た者による、というわけだが、それでも疑問は残る。答えはすでに答えられている、と気づくことは、必ずしも「別の答え」に行き着くことを意味しない。だからこそカベルも「かもしれない」との譲歩をつけているのだろう。ただ同時に、答えを出せる可能性も示唆されている。だからそこ「かもしれない」との望みを含ませたのだろう。とすれば、どのような可能性において、「別の答え」に行き着くのだろう。カベルは、「冬の湖」の章に、「自分自身の二重の影 (a double shadow of myself [原文挿入は引用者])」を見ることがあった、という表現があることに着目する<sup>22)</sup>。続けて「孤独」の章に「他人からと同じぐらい自分から離れて立つことができるようなある二重性 (a certain doubleness [原文挿入は引用者])」を感知している<sup>23)</sup>との表現を引用する。カベルは言う。

『孤独』の章において、傍観者であるのは二重性 (the double [原文挿入は邦訳者]) であり、発生の場面は私である。『ウォールデン』における二重性の非人格性、あるいは公正さは、渴望の精神的突破であり、書き手の行為能力を解放する忍耐力の現れである。<sup>24)</sup>

「書き手の行為能力」とは、すなわち書く力であろう。その解放の現れとは、つまり自らの答えを書くことができた、ということである。しかしその「自らの」というところに注意しなければならない。「目覚め」た者は、かつて「眠りにある人々」のひとりであった。その者が、一般的な問答の次元から距離をとったとはいえ、新たな答えを書くことは容易ではない。誰か他の者から——例えば、先に「目覚め」た者から——何かしらヒントをもらえば良いのだろうか。しかしその者もかつてはやはり眠りにあったのだ。先に「目覚め」た者が新しい答えを得ているとは限らないし、もし得ていたとしても、それはすでにその者によって答えられた答えだ。とすれば、「別の答え」とは、「目覚め」た者自身のなかに見いだされねばならない。その様子を、二重性 (the double) という概念を用いてカベルは描写しようとする。

二重性 (the double) とは、「もうひとりの自分」である。齋藤は訳注において述べている。「“the double”には二重身、分身の意もあるが、ここではソロー独自の見方としてカベルが描き出す自己の状態に力点をおいて『二重性』と訳す」と<sup>25)</sup>。二重性の感覚とは、カベルにおいて、「内なる居住者として無意識的に建てることに従事するという側面からみたお



のれ自身」と「公正に観察する傍観者という側面からみたおのれ自身」の関係である<sup>26)</sup>。まず通常、人が意識せずに自己だと思っている自分、「眠りにある人々」のひとりとしての自分がある。しかし二重性の獲得により、それを傍観する自分が登場する。この二者は、当然のことながら共に自らのうちにある。

さて、ここで二者の関係に目をむけてみたい。カベルは二者の「統合」を説く。その「統合」とは「相互吸収としてではなく、永続的な隣接性として、すなわち、隣人関係を築く行為、友人関係を築く行為として」みなすことにある、と<sup>27)</sup>。自らのうちに現れたもうひとりの自分と、「目覚め」の前から慣れ親しんでいるいわゆる自分との関係には、独特の親密さと緊張感があるようだ。互いに同意しあうだけでは「相互吸収」になってしまう。しかしもう一方で、破壊的な対立・分裂が望ましくないことは、カベルが「統合」を語っていることから分かる。「隣人関係」「友人関係」において、決定的な分裂とは、すなわち関係そのものの解消であろう。また、「自己の隣人関係を築くということは、自己の同伴性 (companionship [原文挿入は邦訳者]) としても明らかにされている<sup>28)</sup>」との一文もある。二重性は、吸収されないながらも、しかし同伴し続けなければその任を果たせない。それでは、二重性と、かつてより在る無意識的な自分との関係において、何が行われるのか。それは、互いを離れて見ることであり、しかし常に共に在ることであり、つまりは永続的に隣に居ることである、といえよう。

それでは答えたことにならない、という声が聞こえてくる。離れて見合い、共に在り、隣に居て、そして何を為すのか。その点をこそ述べよ、という声だ。思い出してもらいたい。二重性の発生は、「目覚め」のなかにある。二重性と、いわゆる自己との間において為そうと試みているのは、まだ答えられていない答えを、自分の答えを、書くことである。カベルは言う。「自己に対する自己の応答性は、覚醒の可能性である<sup>29)</sup>」と。「応答性」の原文は“answerability”である。語の成り立ちにそって言い換えるなら、答えることのできる能力ということになる。近似した語として、反応する能力としての「責任」(responsibility)の文字が、自然に思い浮かぶ。この連想をとらえて考えを進めるならば、責任を持ち、答えを述べる、そのような働きを持って二重性はあらわれる。あるいは二重性との出会いにおいて、自己は責任をもって自分の答えを言葉にしようとする。これが、カベルが描くソローの「目覚め」の様相と言えるのではあるまいか。

とするならば、ソローカベルの「目覚め」とは、誰かから起きろと言われたその声により直接的に目が覚めるという種類のものでないことは明らかである。自身の二重性によって自己の覚醒がもたらされるのであれば、本節の冒頭から考えてきた預言者の役割とは、眠る者を直接やり起こすのではなく、自らが自らによって起こされる状況を喚起する、という重層的な企みとなる。すると預言者の使命は、「あなたの生活は眠っているようなものである。ゆえにあなたは起きねばならない」というような、つまりは「AはBである。ゆえにCを為せ」というような、単線的な論理ではとうてい達成されない。こうして、本節の関心であった、ソローとカベルの声が内包する複雑さへの、つまりはなぜ読みがたく書かれたのか、と

いう疑問へのひとつの解釈が成り立とう。

しかしまだ問うことを止めるわけにはいかない。なぜならこのような解釈は本稿自体の冒頭の問いに私たちを立ち帰らせるからである。すなわち、このように書かれた書物を読むことが、教師教育にどのようなエネルギーをもたらすのか。あるいは、教師がこのような「目覚め」を経験するとは、どのようなことなのか。最後の節で考えたい。

### 3. どのように教師は読むのか：教師であることの不明瞭性を超えて

第1節では『ウォールデン』『センス・オブ・ウォールデン』をどのように読むのか、という問題を論じた。第2節では、こうしたソローカベルの作品が、なぜ読むこと自体について問われるような仕方でも書かれたのかを考えてきた。本節では、このように書かれた本を読むことが、教師教育においてどのような影響を及ぼすのかについて考えてみたい。

さて、このように書かれた本、と述べたが、前節ではより具体的に、預言者としての働きを持つ本、という表現でその特質を明らかにしてきた。すると、本節の命題を「教師が預言者としての本を読むことの意味とは何か」と言い換えることができよう。先にカベルがソローに預言者としての役割を見いだしたことを指摘する上で、ポール・スタンディッシュの論に触れた。ここで、特別連続講義のもうひとりの講師、ルネ・アルシラもまた、ある特質を備えた書物の働きを「励ましを与える預言者<sup>30)</sup>」と描写していることに注目したい。このような書物を、アルシラは「完成主義的なテキスト<sup>31)</sup>」と呼ぶ。完成主義とは、カベルの提唱する「エマソンの道徳的完成主義」のことを指す<sup>32)</sup>。アルシラは、カベルの完成主義は、「理論ではなく、人生の部分」であり、ゆえに「あまり説明的な力を前面に出さない」としている。それは「むしろ意図して描写的」であり、「文学や哲学の作品を見渡そうとする」ものである、とも<sup>33)</sup>。このような性質を意識した上で、しかし論を進めるために必要と思われる程度の説明的叙述を試みたい。アルシラは、完成主義の側面を、自己理解という視点から捉えようとする。

自己理解。これは完成主義を構成するテキストの著者たちが確かに求めていたものであったろう。テキストの来歴は、自己の不明瞭さである。自己の不明瞭さは、その状態の耐え難さの自覚、そして自らの道を見失った状態において道徳的に危険にさらされているという自覚により、混乱している。<sup>34)</sup>

預言者の働きをするテキストが根底に抱えているのは、自己の不明瞭さによる耐え難さの自覚であるという。ここで想起されるのは、カベルのいう第一の「目覚め」である。今までは全く違和感を感じていなかった日常の問答が、突如としてうまくいかなくなってしまう。分かっていて、と感じていたはずの自己が、突然不明瞭になってしまう。あるいは自己が不明瞭であることは以前から分かっていたはずなのに、なぜかその耐え難さに否応なく捕われてしまう。アルシラの言葉を援用するならば、第一の「目覚め」はそのような感覚への自覚

であると説明できよう。

それでは、第二の「目覚め」はどうか。アルシラは言う。完成主義的なテキストとは、「自らの道を失った者」に対して「その者自身の道を探し始められるよう援助するような友人」である、と<sup>35)</sup>。その友人とは、どのような役割を持つのか。アルシラは三点述べる。ひとつには、自己を分からなくなっているとはどういうことなのかを理解してくれる、共感的な同輩。次に、自己の不明瞭さから自己理解へとつながる道を、かつて見いだした者として、そして他者も見いだせるであろうと語りかける、励ましを与える預言者。そして最後にあげる役目は、全ての人に語りかけるように見せかけることは決してないが、読者が自らの方法を探し始めるであろうとの希望において、テキストの自己理解の仕方に対し批判的に応答するよう、読者を同胞かつ個人としていざなうこと、である<sup>36)</sup>。カベルにおける第二の「目覚め」を思い出してみよう。目の前にある問いは、すでに「眠りにある人々」によってすでに答えられていることを知った上で、「別の答えが出せるかもしれない」との望みを持ち、そのような答えを自らの手によって書こうとする。それが第二の「目覚め」の課題であった。アルシラによれば、完成主義的テキストは、テキスト自身の道の見だし方を示しはする。しかし読者にその道をそのままになぞることを求めはしない。その働きは、読者自身がそれぞれの道を求めることを促すことにある。

このようなテキストとの出会いは、実は簡単ではない。なぜなら世に出回る多くのテキストは、「道を見つけた」と言い張りながら、それは「目覚め」の前の問答を繰り返しているにすぎないから。あるいは稀に独自のやり方で、「私はこのようにしてこの道を見つけた」と主張する書物もあろう。しかしそのような書物も、「ゆえに読者もこの道を進め」と押し付けるといふ陥穽に落ち込んではいまいか。はたまた自らなにがしかの道のりを越えてきたことを記しつつ、なおかつ「しかしこれは私の道でしかない」との謙虚さを失わずにいなからも、読者をそれぞれの道の探求へといざなう力まで有していない、という場合もあろう。完成主義的なテキストとの出会いは、かくも困難なものであるならば、本稿の冒頭において筆者がふれたような「分かりづらさを伴う」という困難は、そのテキストの預言者としての役割を損なうものではない、ということになる。スタンディッシュは『ウォールデン』を、プラトンの『国家』やルソーの『エミール』と同一線上にある完成主義的なテキストとした上で、こう述べる。「ルソーの目的は、教師としての秘訣を提供することではなく、善き教育というものが決定的な役割を果たす実質的社会哲学を申し立てること」であったのと同様、「ソローの実験は、ある種、生涯教育に匹敵するような生活の可能性を規定」した、と<sup>37)</sup>。カベルのテキストも同様に、明日の授業で使える秘訣を教師に提供するものではない。教育と生活の新たな可能性を示唆するものである。そして、教師として学び、生きることは教師自身の務めとして開かれて在る。

こうして、教師が『ウォールデン』『センス・オブ・ウォールデン』を読むことの意味合いが見えてくる。ここでも層はふたつある。ひとつは、教師による自らの役割の捉え直し、という意味である。教師が、自らが何を教えているのか、なぜ教えているのか、そして教師

とは何者なのか、教師である自分とはどのような存在なのか、一日の、一週間の、あるいは一年の、身をすり減らすような働きの後に思ったとする。そこでは、「役に立つ」はずだったスキルも、「実践的」だった知識も、その者の問いの前には力を失っている。しかし一方で、絵空事のように思えた森に寝起きする青年の言葉が、あるいはその青年の言葉を読み込もうとする哲学者の試みが、自らの問いに応答する二重性の声を聴く助けとなるとすれば、教師は疲れた腕をのぼし、本を開くだろう。その教師が、再び教室に立ったとき、何が起こるだろうか。すでに新しい答えを書いているだろうか。それとも、未だ「うまくいかなかった、という印象」を抱えたままだろうか。それは分からない。しかし、程度の差こそあれ、「読むこと」におけるふたつめの意味はその者の中に宿っているはずだ。目の前にいる、いま教室で学ぶ者にとって、自らもまた預言者のごとく声をあげる者であろう、との自覚である。

異論はあるだろう。スランプに陥った教師がいて、町から居心地が悪くて森に入った青年がいて、お互い同じような悩みを共有し、共感できました、というのでは、もともとのナチュラルスティック、ロマンチックな読み方とどう違うのか、と。しかし、このような私がいて、似たような他者がいて、という構図には、確たる「私」が存在している。このような「私」が前提となっているからこそ、「似たような他者」を認識することが可能になる。アルシラはそのような「私」への前提が危機に直面している、という状態から出発した。カベルの「目覚め」にあっても、「眠りにある人々」の間で成立していた構図が上手くいかなかった、との自覚が第一段階である。そうであるならば、読み手とテキストとの間の友人関係、隣人関係は、上記のような感傷的共依存的関係とはまた違った種類のものであるはずだ。では、それはどんなものか。完成主義のテキストを貫くテーマに「自己理解」がある、とのアルシラの説を想起されたい。自己を捉えられなくなっている時に、テキストに友人を見いだす。ここで実は、友人を見いだすと同時に、そのようなテキストを通して、自己を捉え直しているのではなからうか。ここでの「共感」は「共鳴」に近からう。自らの声が聴こえない。他者の声は、もちろん自らの声ではない。そのような時に、自分が語りかけた友人から語り返される声を聴くことによって、すこしずつ自分が何を語ったのか、語ろうとしていたのか、理解し直すことが可能になる。「言語を通じた自己変容」とは、そのように、いちど応答において失ってしまった声を、別の応答により再獲得して行く過程にこそあるのではなからうか。「読むこと」を通しての教師教育は、「読むこと」を通して教師とは何者であるのか、教師である自分は何者であるのか、自らの答えを「書くこと」を促す。そして、そのようにして書かれたテキストは、様々な形はあるにせよ、預言者として、読む者を励ますだろう。

### Ⅲ. 結 論

『ウォールデン』『センス・オブ・ウォールデン』を読む際の疑問から本稿は出発した。教師教育というテーマに照らし合わせ、このようなテキストをどう読んだらよいか。第1節で取りあげたのはそうした問いであった。やがてそれは第2節での、それではテキストがど

のように書かれているのか、なぜそのように書かれているのか、ソローとカベルの哲学に身を浸すなかで考えようとする試みへとつながった。第3節においては、ソロー・カベルの著作を完成主義的テキストとみなす視点から、「読むこと」を通じ、教師が、教師としての自らの働きを捉え直すことの可能性を論じた。

こうしてカベルの「読むこと」の思想には哲学-実践的教師教育の側面が見いだせるのではないかとの探究を進めてきた。ソローとカベルの作品を通して、「読むこと」の豊かさについて、拙い筆致ではありながらも幾分か言及することができた。本稿の締めくくりに際し、そのことを素直に喜びたい。今後、「読むこと」を通しての教師教育を論じ続けて行く上で、(1) 何を読むのか、(2) どのように読むのか、(3) どのような教師教育が見いだせるのか、の三点に着目し続けて行きたい。そしてこの三点はすべて、カベルがエマソンやソローを読む過程において、預言者の言葉のごとく謎と力をたたえつつ示されているのだと考えている。

本稿の多くは、件の特別連続講義と、京都大学教育学部における2006年度「臨床教育学講読演習」の授業全体を通して出会った方々からの教示、及びその方々の言葉により綴られているといえる。そのような力づけと言葉を与えてくださった方々に心よりお礼申し上げます。

#### ✦注

1) Stanley Cavell, *The Senses of Walden* (Chicago: The University of Chicago Press, 1972); スタンリー・カベル『センス・オブ・ウォールデン』(齋藤直子訳 2005年 法政大学出版局)。

2) 本稿では一般的な意味での読書の行為と、カベル哲学の根幹を形成すると思われる「読むこと」の思想についての記載を区別するため、後者の場合にのみ括弧付けて「読むこと」と記す。ただし、「読む」という動詞(及びその活用形)や「読み」といった名詞に関しては、この範疇ではない。理由は(1) 読者の理解の助けとなるよりもむしろ妨げとなるような煩雑さを避けるため。(2) 一般的に考えられているところの読む行為および読書という概念と、カベルのそれらとが全く乖離しているわけではなく交錯している点もあり、常に厳密な差別化を適用することは困難であるし、また適用しようとする事自体に特段の意義を見いだし得ないため。

3) 因習的な教養主義への批判として、例えば佐藤学は“armchair philosophy”と評すなどして論じている。Manabu Sato, “Japan,” in *Issues and Problems in Teacher Education*, Howard Leavitt, ed. (New York: Greenwood Press, 1992), 121.

4) Henry David Thoreau, *Walden, or Life in the Woods* の邦訳をさす。『ウォールデン』との邦訳がつけられる場合もあれば、『森の生活』と訳される場合もある。特に本稿において同書の邦訳を引用する場合は、H. D. ソロー『森の生活(上)』『森の生活(下)』(飯田実訳 1995年 岩波書店)を使用する。しかしカベルは *a Life in the Woods* という副題を使わず、常に *Walden* と記述していることから、本文においてはソローの当該書を『ウォールデン』と記すことにする。

5) 齋藤『センス・オブ・ウォールデン』xiii頁。

6) Ibid.

7) Stanley Cavell, *The Claim of Reason: Wittgenstein, Skepticism, Morality, and Tragedy* (New York: Oxford University Press, 1979), 125.

- 8) Hilary Putnam, "Philosophy as the Education of Grownups: Stanley Cavell and Skepticism," in *Reading Cavell*, ed. Alice Crary and Sanford Shieh (London: Routledge, 2006), 119.
- 9) 齋藤直子「教育としての哲学・哲学としての教育——カベルの『センス・オブ・ウォールデン』を読む」『UTCP叢書1 いま、哲学とはなにか』(2006年 未来社) 183頁。
- 10) 両氏による特別連続講義は2006年11月から12月にかけて京都大学大学院教育学研究科において行われた。
- 11) 齋藤「教育としての哲学・哲学としての教育」179-180頁。
- 12) ソロー『森の生活(下)』203頁。
- 13) ナチュラリストとしてのソローに関して、邦文では例えば以下のような文献がある。伊藤詔子『よみがえるソロー』(1998年 柏書房); 上岡克己「自然を表現する文学——ソローの現代的意義」『MINERVA 英文学ライブラリー2 アメリカ文学の〈自然〉を読む——ネイチャーライティングの世界へ——』(S. スロヴィック他編 1996年 ミネルヴァ書房) 199-215頁。
- 14) Lawrence Buell, "Introduction," in *The American Transcendentalists: Essential Writings*, Lawrence Buell, ed. (New York: Modern Library, 2006), xxv.
- 15) カベル『センス・オブ・ウォールデン』120-121頁。
- 16) 田中智志「図書紹介: スタンリー・カベル著 齋藤直子訳『センス・オブ・ウォールデン』」『教育哲学研究』第93号(2006年) 170-171頁。
- 17) Paul Standish, "Uncommon Schools: Stanley Cavell and the Teaching of Walden," in *Studies in Philosophy of Education*, 25, 2006. 149.
- 18) Ibid., 148.
- 19) Ibid.
- 20) 以降、ソロー・カベルが思想的な課題として取り組んでいる種類の覚醒 (awakening) を「目覚め」と記し、それ以外の一般的な意味の目覚めと区別して用いる。
- 21) カベル『センス・オブ・ウォールデン』121頁。本文中で断わってあるように、第1節での引用部分からの抜粋である。繰り返しての引用の中ではこの語に限り、その短さもあって確認の注をつけた。
- 22) カベル『センス・オブ・ウォールデン』122-123頁; ソロー『森の生活(下)』221-222頁; Henry David Thoreau, *Walden* (Oxford: Oxford University Press, 1997), 262.
- 23) カベル『センス・オブ・ウォールデン』123頁; H. D. ソロー『森の生活(上)』(1995年 岩波書店) 243頁; Henry David Thoreau, *Walden* (Oxford: Oxford University Press, 1997), 123.
- 24) カベル『センス・オブ・ウォールデン』123-124頁。
- 25) Ibid., 208頁。なお、以降、二重性という用語は、分身(=もうひとりの自分)との意を含んだ語であるとの了解のもとに使う。ゆえに原文 "the double" の併記は省略する。
- 26) Ibid., 130頁。
- 27) Ibid.
- 28) Ibid. 131頁。
- 29) Ibid. 132頁。
- 30) Rene Arcilla, "Perfectionism's Educational Address," Unpublished paper.
- 31) Ibid., 1.
- 32) Ibid.
- 33) Ibid., 2.
- 34) Ibid., 3.

35) Ibid., 5.

36) Ibid., 8.

37) Standish, “Uncommon Schools,” 148.

(たかやなぎみつとし 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程)